

# David Matza, *Becoming Deviant*,

1969, Part II (一)

小野坂 弘

一 第八巻一号にひきつづいて、第二部の紹介をおこなう。

まず、本号では、第五章と第六章を取扱う。マッツァのこの本は注目を集めたが、内容については Ian Taylor, Paul Walton & Jock Young, *The New Criminology: For a Social Theory of Deviance*, 1973, esp. pp. 188-192 (第一部と二部は異論なし) 認識論に「つづいて」 Deryck Beyreleld & Paul Wiles, "Man and Method in David Matza's, 'Becoming Deviant,'" *British Journal of Criminology*, 1975, vol. 15, no. 2, pp. 111-127 が厳しい批判をおこなっている。

マッツァの本著書の第二部の導入部分は次のようにいう。逸脱現象、とくに犯罪・非行および精神病の研究者は、原因論または因果的説明と普通呼ばれる問題に圧倒的な注意を向け、逸脱現象の他の局面をほとんど無視してきた。その理由の一つは、原因論が改善(correction)目的にとって適切であるからである。しかし、その理由が何であれ、原因論の正当性や価値に挑戦しようとする人はほとんどいないであろう。われわれにとって問題なのは、原因論——もっと控え目について「逸脱者となること」(becoming deviant)——が自然主義的な研究と考えられて来た、種々の仕方である。三つの重要な基本概念が考えられる。これら三基本概念は、われわれの研究対象——人間——に異なった仕方ではあるが適切である。そして主体が逸脱者となる過程を明らかにするためには、三基本概念は、それぞれ異なった程度で再構想を必要とする。

二 第五章は「Affinity」<sup>(1)</sup>と題されている。Aは実証主義以来、逸脱者となる過程の説明における中心概念であった。逸脱者となる過程についての大抵の研究と説明は——細かい点は、たとえば体格、人種、知能、家庭生活、貧困、社会階級、教育上の失敗、急速な社会変化、移民、青少年期の動揺等の違い

があるが——Aの考え方にもついていた。限定されてはいるが、重要な意味で、現代の社会学者の多くは、依然として、ロブローゾ等の実証学派に従っているといえるのである。理論の論理、研究の計画は、より非行者である者がより非行者でない者から区別される条件をさがし出し、次に、首尾一貫した、原理上、論証しうる理論を提示することによって、この差異を理解することである。そして、その場合の推論の様式がAなのである。すなわち、ある先行条件が人々または人々の集団をある予測される結果へと向い易くするということである。予測される結果とは、逸脱のより高い率である。知識がより完全になり、分析がより洗練されれば、予測は一層確実になり、結局、われわれは一つの原因を、すなわち、必要にして充分な条件を手に入れるであろうと。

どのような過程によって、諸条件はある集団のメンバーを予測しうる結果（「非行のより高い率」へと動かすのだろうか。Aはこの中心問題について語る。語られる用語は大抵他の水準の存在についてのものである。Aは多くの意味をもっており、人類学・生物学・化学において術語として慣用されている。人間が逸脱者となる過程の研究においては、Aの意味は化学にお

いて使われているものにもっとも近い。化学ではAとは、原子の間に種々の程度で働く引き合う力を行い、原子を結合させ、その結合を維持するものである。類推によって次のことが示唆される。適当な傾向をもつ人々は、ある現象とその現象をすでに支えている社会的サークルへと引きつけられるであろう。もし必要ならば、そのような人々は新しく、現象を作り出すであろうと。客体はただ反作用するだけだから、文字通り、条件によって決定される。生命は適応するものだから、環境を作りあげている諸条件に反応する。引き合う力としてのAはこれらの水準の研究には大いに適している。しかし、人間の研究においては、Aの概念は人間の主体的能力を——この能力が減退していることが認められる場合でさえも——確認するように改訂されねばならない。ほとんどの人がこの改訂を全く気にせず、自然科学と人間の研究の間の無批判な移動を承認している。若干の人達はAの概念を全く拒否しているが、本当の仕事はA概念の人間の改訂なのであり、それはまだほとんど始っていない。A概念の改訂は、主体が——彼を動かし形成すると称される——諸条件に関係する独特な仕方を理解することから始まらねばならない。

主体(『人間』)は、意味を作り出し、帰せしめることができ、自分を取り囲む環境と自身の固有の状態についてさえ熟慮する能力をもち、予想・計画・投企に身をゆだねて、人間は条件に対して複雑な関係に立つ。もちろん、人間はしばしばあたかも有機体として全く適応的に、そして、非常に稀には、単なる客体であるかのように全く反作用的に反応する。しかし、このような事態は人間の状態ではなく、人間の状態の疎外または消耗と考えられる。人間は積極的に自分の条件と取り組み、立ち向う。主体の独特の能力は条件を作り変え、作り出そうと努力し、そして実際にのり越え、ことである。ところで、Aとは主体の個人的・社会的条件から生じた、自然な人生の傾向であって、動く方向を示唆はするが強制はしない。それはとき放たれるまでは潜在的なものである。Aが顕在化するためには常に、存在している主体的能力がなだめられ、あるいは減退して、主体が客体に似たものにならねばならない(そうでなければ条件はのり越えられてしまう)。客体化されて、主体はあたかも客体のように振舞う。この転換は——“natural reduction”と呼ばれる——社会生活の普通の特徴である。ある種の抑圧的状况では、人間は処理され、タイプされ、ファイルに要約される、

つまり非人間化される。いかなる人間的環境にあっても、人間はしばしば切り下げられ、追い払われ、見落される。いずれの場合にも——程度は違うが——主体的能力は一時的になだめられ、Aの概念によって人間の行動が明らかにされう。社会的な世界で行われている客体化活動のために、Aの概念は生き残り、社会学の描く像と現実の現象の間のミゾは不明瞭にされる。普通の人間と特別の機関によって行われる、この客体化こそ逸脱行動の「温床」である。このことは、特に、社会学に愛好されるAにあてはまる。

**愛好されたA** 主体の研究に合うように改訂されれば、Aはありふれてはいるけれども有用な考え方である。ある種の条件は、主体が自然に転換されている場合に活性化する、逸脱行動への潜在的傾向、引力を促進するものと考えられる。このことについては、社会学者の間でかなりの合意が存在している。多様な装いと理由の下で、同じ条件が逸脱が栄える環境の探求において社会学者に愛好されて来ている。Aの概念は改善の視点が一般に後退した後にも生き残った。特に愛好されたAは貧困と病理とを関係づけるものであった。

シカゴ学派も貧困と病理の一般的関係を支持した。しかし、

「社会問題」の初期研究者に反対して病理へと導く貧困の局面を特定し、定式化も基本的に異なっていた。すなわち分析の用語は「価値しない」から、「解体している」に変わった。シカゴ学派は貧困の伝統的概念に含まれていた、逸脱への傾向が活性化されうる一つの装置として「社会解体」を用意したのである。

社会解体は通常の統制の破産にまで達するが——経済的に恵まれた人々の間では普通である——同調への利益を欠いている貧乏人の間では特に、共同体組織の解体は逸脱衝動を解放する。

解体地域は磁石のように抑制のない人々を引きつけ、そこでの逸脱行動の頻度はかなり高いであろうと。シカゴ学派の生態学的研究は彼等の一般的仮説を強く論証し、逸脱の安定した生息地を見つけた。しかし、組織が崩壊している場合には、たしかに貧困が逸脱への強い傾向を作り出すことを認めるとしても、このAには難問が残されている。第一に、シカゴ学派は逸脱行動の量と分布について公式の統計に依存しているが、これは多分、解決しえない立証問題を提起する（公式統計の逸脱行動の率を信用するならば、もっとも解体されたスラムの住人も逸脱への誘いに、しばしば抵抗し、むしろコンベンショナルな行動を選ぶといえる）。第二に、ここでは一層重要であるが、

シカゴ学派は主体が条件によって形成され、スラム生活の原型傾向に引きつけられるためには、主体が客体に転換することが必要であることを理解していない。統制から自由であることは解体の結果であるが、この自由は（逸脱への）決定ではなく、選択を思わせるのである。

貧困と病理の間のAは機能主義においても維持された。このAのマートンによる新しい解釈はいう。成功の宣伝によって攻めたてられ、そして、このたき込まれた目標の実現を階級の壁にはばまれる下層階級の人々（「貧乏人」）には、公式統計上逸脱の率がより高い筈であり、事実そうであると。マートンはこのように主張するためには、公式統計の信頼性を支持しなればならなかった。勿論マートンは公式統計をそのまま信用するのではなく、批判的態度を示した。しかし、マートンの批判的態度とは、以下に示すように奇妙なものであった。マートンはウォーラーシュタインとワイルの、遵法的と考えられている人々の発覚はしていないが自認された犯罪についての研究を、肯定的に引用している。マートンは不法な行動は異常な社会的または心理的な表示であるどころか、本当はごく普通の現象であることを認める。しかしながら、マートンの前記研究の引用

はこの研究の画期的な意義——逸脱者となる人々の選択過程で、統制・登録機関によって演じられる役割を強調する理論の礎石——を正當に評価するよりは、力をそぐことを意図していた。マートンは前記研究に挑戦し、あるいはこれを一笑にふする代りに、この研究を肯定的に引用し、次に結論（つまり、目標と手段の不統合と逸脱行動発生との間のA）を繰り返して、この研究の成果を無視した。このようにして貧困と逸脱の間のAは無傷で生き残ったのである。

逸脱の分布——社会各部分ごとの率——はこのAの土台である。公式統計は、勿論、量的に過少であるけれども、逸脱の実際の分布を反映しているかも知れない。この可能性はA・コーエンによって強調された。コーエンは非行と下層階級の間のAがどのような過程で発展するかを考える前に、このAの統計的基礎を弁護した。コーエンはポーターフィールド、ウォーラー・シュタイン・ワイルに一貫して立ち向った（彼等の研究が道徳的な人々の間の知られていない非行を発見したことは認める）。問題は依然として未解決であるが、公式統計は多かれ少なかれ、非行の本当の分布を反映しているというコーエンの主張は、公式に登録された非行と本当の分布の間にはほとんど関係を

認めない主張よりも若干納得的である。

マートンの分析において、したがってアメリカ社会において、主要な文化的目標は成功であった。しかし、成功は——現代の大都市生活という——特定の文化的文脈においてのみ圧倒的に重要なのである。成功は、別の目標が現代都市社会では勢いを失うが故に優勢となる。都市の生活の哀れな特徴そのものである匿名性こそ、金銭の抽象的能力が生ずる文脈である（これに対して匿名性は金銭から、資格を問われず束ばくされないという価値を奪う）。貧乏人の逸脱傾向は一部は、シカゴ学派およびジンメルによって強調された、大都市生活の特徴にもとづく。ところがマートンにとってはそれは金銭と成功を優勢なものにすることを許す抽象的条件であった。もしも、この大都市生活の特徴に関するシカゴ学派の配慮に注目していたならば、マートン等は逸脱を育てる特定の貧困——シカゴ学派では「解体している貧困」——についての洗練された推論に達したであろう。マートン（特にオーリン・クロワード）が当時行われていた労働者階級の社会的移動の研究にもっと注目していたならば、適切な結論がでたかも知れない（階級の壁にこれ程に依存している理論が、社会的移動の性格と程度にこれほど無関

心だったとは。)

Aは逸脱者となる過程の理解において、社会学の安定した戦術であるが、比肩しえない優勢性を失った。安定のための低俗化、確立しているための過度の手続・洗練化。Aの研究において得られたものは、創造性と生命力において失われたものと対応している。Aは一方では非常に抽象的な、形式的な命題に、他方では方法論に表現されて来ている。具体性、したがって自然主義はこのような状況の中には場所がなく、“affiliation”<sup>(2)</sup>と“signification”<sup>(3)</sup>の考え方に新しい住家を見い出す。Aは文脈の外ではあまりに抽象的な概念である。Aを人間的な文脈に戻さねばならない。それは、逆説的ではあるがALとSの文脈である。

### 三 第六章は“Affiliation”である。

シカゴ学派は貧困と病理の間のAを維持したが、この一致を説明する別の概念を示唆している。サザーランドはAの論理と有用性をはっきりと否定し、逸脱者となる過程を理解する鍵概念としてALをAに代え始めた。そして、ALの考え方が発展すればする程、Aの意味がますます明らかになってくる。ALの原初的な概念——人間化される前の概念——は「伝染」または

「感染」(contagion or infection)である。すなわち、人間は適当な状況におかれ、充分にさらされるならば、逸脱に「かかる」筈だと考えられた。もし、事がそのように運ばなかった場合には、この「筈」(must)はいつでも、あいまいな「かも知れない」(may)にされるのである。そして、この言葉のこまかしは、医学におけると同様に、主体が感染にかかり易くしなければならぬ、つまり主体は自分の環境に起こることに屈服する前に、それに対するAをもっていなければならないという認識に対応している。このように原初的なAL概念はAと協同しなければならぬ(Aの熟した概念につき後述)。逸脱が病理と考えられ、研究用語が伝染病学のものであり、人間の環境が木や狐のそれと同じものとされている間は、ALの原初的な概念は当然であつた。しかし、伝染は現実的な意味をもたず、論理的な意味をもつにすぎない。伝染は抽象化された病理学・伝染病学・生態学に忠実であり、主体の世界に対しては忠実でない。それ故に伝染は、原初的なAL概念の述べられない頂点となつた。原初的なAL概念は超現実的なモデルであり、そこでは各々の抽象的構成部分が世界に対してよりも、他の部分に対して忠実である。伝染は述べられないだけでなく、簡単に反論さ

れる類推、あるいはポピュラーな迷信であり、現実的検討に耐えない。結局、誰も真剣に弁護しようとしなかったのだが、それは「逸脱にかかる」という主張が常識に反するからである。このように、ALの原初的方法である伝染が敗れた結果、伝染を頂点として出来あがっているALの原初的な概念全体の評判が悪くなった。病理学はいつの間にか存在しなくなり、伝染病学・生態学はついには有用な社会的データを収集する単なる方法であることになった。

ここにALの熟した方法として、「帰依」(conversion)が登場する。すなわち、主体は以前は風変わりな、不適當と考えられていた行動に新しい意味を用意されて、自分にとっては新しいが、他人に対してはすでに確立している行動に帰依する。「帰依」という方法は「伝染」に反対して、選択されたのであり、この選択は重大である。しかし、忠実な自然主義にとって、逸脱者となることにはAとALから結果する予定・予測される社会過程はない。人間はコミットメントをすることもできるが、同様にコミットメントをやめることもありうる。逸脱者となる過程についても同様だからである。

**帰依と前もって決っている事** 帰依を使うALの方法の機能

は、人間の研究から、前もって決っているという考え方を一掃し、自ら決定するのだという考え方に代えることである。前もって決っているのだという考えは——超人間的なものと人間以下のものから推論するという——心の習慣をうまく結びつけている。最初は、超自然的なもの(『神』)によって、人間は前もって決められているとされていた。カルヴィンとその弟子達の時までは、この考え方が維持された。その後はこの運命前定の考え方——主体にとっては悪夢であり、研究者にとってはファウストの白日夢である——は世俗化され、科学者という普通の人間によって科学の骨組みの内に維持された。科学者は人間以下のものであり、特に単なる客体の物理世界に目を移し、予測という考え方を発見してこれを人間の領域に移植した。科学者は同様な幻想・大志をもつ聴衆を常に見つけることができたし、更に効果的なことには、学校を始めたり、報酬その他の方法で、聴衆を訓練して自分のいっていることを信じさせることができた。このようにして諸学問が生じた。しかし、常に異端はいたし、訓練されない人達もいた。しかし、初期の科学は自分達が運命前定の考え方——予測——を中心にして、世俗的な正統を作りつつあることを意識していなかったもので、「帰依」

は追放されなかった。そもそも初期の諸学科は偏狭な正統ではなく、寛容であった。彼等は婦依が、予め定められた存在としての人間という考え方と両立しえないことを理解しなかった。婦依する存在は主体である。彼は自分の環境とその中にいる他人と交渉し、彼等と取組み、彼等の信念を考え、彼等の生活スタイルを試し、彼等の間での自分の位置を予測・想像し、そして、彼等を選ぶことは別の人達を排除することになるか否かを考えめぐらす。一度交渉しても、自身のコミットメントを作りあげ、自身と自分の社会的役割の間の距離を作ること、主体でありつづける。人間は婦依後も自分の選択を再考しつづける存在であるが、それを指し示しているのが疑いと後悔である。婦依は少くとも人間の条件の一部をのり越えることを伴うから、もつとも困難な人間的な過程である。よかれ悪かれ、人間はその選択を生き始め、婦依の用語で人生を再形成しなければならぬ。婦依の概念を用いる社会学者は人間的であることを選んだわけで、大変な仕事と取組まねばならない。すなわち、この選択は、他の水準の世界に始まる諸過程を用いることに反対し、逸脱者となる過程を限られた人間の用語でほん訳することを要求する。

前もって決っているのだという考え方に反対する選択はサザーランドの定式化によつては獲得されなかったが、サザーランドのAL概念は選択へ至る道を用意した。彼の「差異的接触」説だけを切り離して考えると、これはほとんど選択がなく人間の忠誠についての競争もないので、婦依よりも単純で、やや人間的でない「学習」の方法にだけ依っているように思われる。しかし「差異的社会組織」論と結びつけると、サザーランドのAL概念には婦依が含まれている。つまり、異なった文化世界間の対立・競争に直面して、逸脱者となることは婦依することにもとづく。サザーランドは、このように、多元主義に敏感であったにもかかわらず、逸脱領域とコンベンショナルな領域の間で、人間および人間の考え方は移動していることを充分に理解しなかった。孤立した未開人から徹底的な文化的分離を、木・狐・昆虫から意志のない無意味な移動を抽象したシカゴ学派の生態学理論に拘束されて、サザーランドの主体は環境にとられた、半人間であった。同様に、サザーランドは単純な学習から完全な婦依へと考え方を変えなかった。したがって前もって決っているという考え方もどうか生き残った。つまり、サザーランドはALを状況の意味と定義を用意するものと考え



たのだが、このような人間的環境に直面する主体は、しばしば選択能力のない(木や狐ノ)または選択すべき手段をもたない(未開人ノ)にとどまった。主体がその際何を考えていようと、それは観念論的な馬鹿馬鹿しい事柄であった。しかし、サザーランドは充分に歩を進めた。彼は——状況の定義、信念、理性、正当化、技術、要約すれば意味によって構成される——帰依の場面を用意することによって、主体を人間性の間際まで連れて行つた。これらを「諸力」または「諸要素」と表現することも可能であるが、同じことである。古い確信(「運命前定の考え方」)は決して以前の力強さに達しない。

今迄欠けていた要素、つまり、主体を人間的に改ちゅうすることが出番を待っていた。すなわち、主体の人間的概念は決して無くなつてしまつたわけではなく、G・H・ミードの哲学の心理学、H・ブルーマーの社会学理論、ヨーロッパ実存哲学の中に存在しつづけた。それは実体的な社会的記述・分析から距離を保ち、原則的な無関心を守つた。「象徴的相互作用」(Symbolic interactionism)も同様であつた。帰依という人間的的方法によるALによって、超現実的なモデルが崩壊する迄は、社会過程の経験的説明に、主体の人間的概念の場所がなか

つたからである。帰依の考え方を——人間の用語ではん訳された——主体に結びつける仕事はH・ベッカーに担われた。ベッカーは自然主義の方法・理論の精神を保ちながら、二つの事柄を巧妙に結びつけた。正統側の動機ある鈍さ——異端を管理する最善の方法は、見ぬふりをする——とベッカーの慎重深さによって、ベッカーの“Becoming a Marhuanan User”はすぐれた研究として社会学に歓迎され、運命前定の頂点を支える一部となつた。今や、重要な仕事が残されていた。すなわちヒューマニズムが異端であることが明示されねばならない。主体としての存在のレベル(そして逸脱者となる過程)で、前もつて決っていることはありえない。自分自身を定めることだけがありうる(主体が他人について定めることは別の事柄である)。

マリファナ吸いになること “Becoming a Marhuanan User”  
において、人間の社会学的概念は完全に人間的なものになつた。ベッカーの叙述はよい自然主義者の叙述であり、ありのままの世界から概念化しているので「洞察」または行動指針として、つまり——人々が何んの気なしにずっとやって来たことをやるにはどうしたら良いかの要約——「処方せん」として役に

立つであらう。世界に忠実である処方せんは、人間主体のありのままの社会過程の二つの基本的特徴、すなわち、意識と意志を確認する。それは世界に現われているもの——非常に基礎的であり、人間存在の一部と感じられているもの——を概念的に強調または明示しただけであって、意識と意志を発明したのではない。それ故、この処方せんはヒューマニズム自然主義の原型といえる。物をなすことは非常に心を奪うことなので、意識と意志を宣言し、明示する気にならないだけである。しかし、処方せんに要約されているように、物をなす場合には世界における人間は意識を使い、意志を想定した。人間である以上、他のことをなしえなかった。ベッカーはこの複雑な過程に忠実である自然主義者としてより明示的に、帰依の過程で意識を使い、誘いの瞬間に意志を想定しただけである。過程は次のようにいえる。誰でもマリファナ吸いになりうるし、誰もなると決まっているわけではないと。

ベッカーは「意志」概念をすぐに使うことを宣言するが、それを当然のこととして行うので見のがされ、もう一つの発見的工夫と誤解される。ベッカーは分析をその気になった主体——マリファナを試してみたい人間——で始める。誘いの瞬間、過

程に入るか否かを選ぶ時点、処方せんが働く前に、ベッカーの主体はその気がなければならぬ。

△その気があること▽ベッカーがこの論文を書いた目的は「行動を先行する傾向 (predispositions) に帰せしめる諸理論」に疑問を示し、「行動を、経験の過程で生じた動機と意向 (dispositions) によって説明することの有用性」を示唆することである。したがって、ベッカーが「その気がある」ことの内に傾向——または前もって決っていること——を密かに持ち込んだという非難は当たらない。しかしながら、主体のありのままの世界では、Aの結果はあることをする気があることであり、それ以上でも以下でもない。Aは強制ではなく、主体が自分で決めることを許す。逸脱現象の「諸原因」にさらされて来たことの普通の結果は、現実にあることをすることではない。それは自分自身を、文字通り、あることをするかも知れない種類の人間と考えることである。主体は自分自身で決定するが、最初はまだ開かれていっていると決める。この決定は誘いの具体的な時点で起こり易いけれども、同様に、遠い時点で空想の内でも起こる。条件が異なれば、主体は自分がその行動に閉じられていると考えるかも知れない。その気があることは可能であること

と全く同じではない。自分自身について思案し、自分の投企を再考することは、決してやまない連続的経験である。コミットメントでさえも放棄されうる。その気がある主体が過程において、自分ではできないと決めるかも知れない。この決心によつて主体は、結局自分はその気があったのではなかったことを学ぶであろう。彼はその気がなくなる。それは経験でテストされない「閉じられた」感じと同じ位に、いやそれ以上に現実的である。彼は次の誘いの時に考え直し、経験でテストしていない人々の間では知られていない確かさで、自分はその気がないことを確認するかも知れない。あること（たとえばマリファナを吸うこと）に自分は閉じられていると感じる人々は自分達が本当にそういう種類の人間であるか否かを知らない。それ故にこの人達は厳格な法執行に賛成する。しかし、この人達も突然、自分はその気がないけれども、可能な人間であることを発見する可能性に直面しなければならない。いずれにしてもAの与えるものは僅かなものであり、何の助力もないならば、閉じられた感じは、あることをするよりは、しない方を選ぶことを予測させるわけではない。しかしながら、閉じられている感じは、コンベンショナルな道德性の担い手であり、充分な人的・物的資

源をもった回避・抑圧機構に支えられている。つまり、閉じられた感じの予測は社会構造の共謀によつて、あることを行う選択の自由にくらべて大きいのである。それなしには、Aの与えるものは僅かなものである。

ところで、われわれはAの与えるものが現実にそのように僅かなものであると、どうして知りうるのか。社会的・個人的条件の結果はその気があるかないかであること、試みとしての選択と閉じることが幻想でないとどうして知りうるのか。それは人間が捕われている状態と対照させることによつて理解されるであろう。このとらわれた状態は主体の普通の状態——人間の存在のレベル——とくらべて適切な対照を提供する。人間は意志を期待し、意識の内に存在する。全ゆる社会組織と規範的生活はこの想定の上に成り立っている。ところで、この主体的能力は人間の有機体の内で発展する。ここに、フロイドによつて〈overdetermination〉と呼ばれた、有機体の意志・意識に対する専制が生ずる。人の行動は決定されるが、それ以上ではありえない。しかし、この決定されているという考え方は、ずさんな用法によつて弱められている（フロイド自身もこの伝統的用法に従う）。そこで、文字通り決定されていることを表現

して〈overdetermination〉といったのである（全ての女性が〈beautiful〉と考えられるなら、本当にきれいな人は〈over-beautiful〉と呼ばれよう）。フロイドは確かに心理的決定論を主張した。彼は決定論の維持に努力したし、決定論において名譽ある地位を占めている。しかし、フロイドの貢献の核心は、この〈overdetermination〉にある。とらわれた状態とは主体が有機体に支配されていることである。たとえば神経症は主体が自分の有機体としての存在とうまくやって行き、それをのり越えることに失敗したことから生ずる。本能のもっとも深い意味は、計画、決定、または前もって決っていることである。有機体の内で、それをのり越えようと格闘している主体の強調はフロイドの中心的イメージであった。それ故に離乳・排泄訓練等を真剣に考えたのである。すなわち、フロイドの主体は肉体をもっていた。有機体の専制は死をのぞいては、部分的なものであり、局限されたとはしりと考えられていた。それは主体には、たとえば神経症では、行動と意志・意識の不統合として「不安」(dis-ease)に感じられる。

修正主義の精神分析と社会精神医学は、主体から肉体を奪い、有機体または本能という文脈を極小化したので、とらわれ

ている状態（＝overdetermination）は土台を失った。彼等はフロイド自身にもあった抽象的傾向、すなわち、心理的決定論の原理に従い、失われた土台をうめ合わせるために、抽象的な文化的決定論をつけ加えた。心理的決定論は抽象的な定式化と無差別の適用可能性をもつ原理で、人間の全存在が影きようされうる。しかし、そのとらわれの状態は抽象的な——拡散した——ものであり、それはむしろAであった。われわれは「その気がある、またはない」この意味を理解するために、それを「肉体をもった overdetermination の理論」に見い出される文字通りの、局限されたとらわれの状態と対比しよう。「その気がある、またはない」ことはAの普通の形態であり、先行条件の普通の産物である。自然の転換が生じなかったならば、条件——先行か現在かを問わず——の把握力は限られている。それはわれわれの研究対象——人間——の本質上、そうなのであって、人間行動の決定要因についての知識が不完全であるからでない。「その気がある」ことは、開かれた過程が継続することを許す人間的な飛躍である。

／＼始めること Being Turned On／＼過程は主体を通じて媒介され、主体から形態を受けとらねばならないから、主体なし

には意味をもたない。実際に行爲をすることが大切である。しかし、それだけでは開かれた過程は完結しない。何かを一度やったことがある人で終ってしまうかも知れない。主体が距離をもって現象を見ていたのでは、それ以上過程は進まない。現象の外にいる時に重要な問題はAの問題であるが、それとても——われわれは現象に閉じられているかも知れないから——抽象的なものである。ところが、あることを実際に行うと、主体は、現象に、現象を内部から見ることに、そして帰依に具体的に開かれる。彼はAの意味を経験の過程で明らかになった意味に照して再考する。再考の用語はAの条件が用意する。主体はAの意味を(最初にAL、次にSという)経験の過程で作りあげる。別の動きをする迄はこの用語と問題に拘束されるが、やめることも、始める、または帰依することもできる。最初にあることをするのは探りの飛躍であり、自分自身と自分の行動を具体的に検討する機会を与える。ベッカーの前記論文はマリファナ吸いというALの条件が提示する用語・問題、そして、主体が帰依する過程を考察している。

(マリファナ吸い)の技術を学ぶという、一見単純な事柄にさえもAの意味は生ずるし、再考も始まる。高揚する(Being

high) ためには独特の吸い手 (inhalates) にならねばならないのだが、何故、こんな簡単なことがマリファナ吸いになるか否かを決めるのだろうか。主体は単に経験を考慮しているのではなく、自分自身の経験に対する関係——Aの人間の意味——を考えていたのである。主体は自分の状況から関係の観念を直観し、しかも、それを使う能力をもつ。人間は自分自身の力だけによって進みつつける。どのようにして進むのかといえば、主体が自分自身を意識し理解することによってである。第一に、主体はあることをしている自分をありのままに描く。つまり、ミードの用語でいえば、彼は自分をマリファナ吸いとして対象化する。第二に、主体は関係の直観をAの意味へと作りあげる。両者が結びついて出来あがるのが相関関係である。すなわち、マリファナ吸いとしての自分と他の投企の内にある自分との関係である。

主体は今や行動の境界にいる。マリファナ吸いとしての自分とその他の投企における自分との相関関係はある方向を示唆する。主体は再考し、気持を変えることができるのだから、この示唆は弱いもので充分である。そして、主体はまさしく決心する。主体は決心した印を世界に示す。これこそ、「自分自身を考

える」ことの最終的で、もっとも深いレベルである。意味に満ち満ちて、主体は体験の流れを生み出し、それに貢献する。すなわち、主体は行為を作り出す。主体はこの過程を通じて権威を維持している。つまり、各々の鍵要素の作者であった。彼は、A Lの文脈によって用意された材料から、過程を作りあげた。A Lの条件はかなり寛容であった。勿論、帰依への圧力を加えるけれども、A Lの条件が要求した全ては——それも決してしつこくではない——主体が決心をすることであった。まさしく「開かれた」過程である。

更に、特定現象の支持者達は他の点でも評価される。つまり、A Lの諸条件は、特定現象が提供する条件・問題の他に、一般的な諸条件をもつ。これらの諸点の考慮も過程に影きようするが、主体の権威を排除しない。この権威は決して「空っぽの」権威、つまり、あるけれども、めったに使わない権威ではない。A Lの一般的な諸条件も現実離れの評価を与えられる程のものではない。特に問題となるのは、同輩者の集団の圧力である。それは——圧力に屈する外観を呈するが——主体によって考慮されるべき事柄、物事をなすについての一般的再考の一部なのである。

A Lの条件の重要性は、それが主体によって考慮される事柄を留意することである。その媒介者は経験である。ベッカーはいう、主体はマリファナの効果を認識することを学ばないと次の段階に進めない。何故か。効果は自明ではないのか。何故自明でないのか。ベッカーは多分、新しい事柄の効果はめったに自明でなく、効果を認識するには他人の助力を必要とすると考えたのであろう。はつきり目覚めている場合、主体は——たとえ初めての領域に立入った場合でも——自分に起きる大抵の出来事の効果を認識するのに、何の指示も必要としない。たとえば、性的経験がそうである。「あなたが知らないのなら、誰もあなたに教えられない」(L・アームストロング)。何故、マリファナ吸いの場合は違うのだろうか。何故、この場合には、主体は自分に起きる出来事を統御しないのか。答は次の通りである。しばらくの間、主体は統御をやめる。しばらくの間、彼は半眠状態になる(量をすくと、完全に眠る)。この意味で、マリファナの最初の効果は減退した意識である。主体は半眠状態なので、自分が使用している物質の自分自身に対する効果を認識しえない。しかし、全く容易に効果に気づくことができる。その手段は話すこと——意識が減退せず、半眠状態でない

ならば、認識すると思われれることを話されること——である。

この再覽せいの結果は、心を元にもどし、自分と自分の小社会に起きる物事を統御する状態に回復させることである。

半眠状態からさめた後でも心は、マリファナの効果がなくなる迄は普通の意識が戻らない。経験の間は間けつ的に、意識が減退した状態にまどろむ。そして、このしばしばの意識減退の間には、心は——「高揚した状態」と呼ばれる——変った文脈の中にいる。この「高揚した状態」——それは多様な外観の背後にある中味である——は原理としては巨大、程度は僅少、時間は短かい。何が起っているのか。「高い」という日常用語は、あるものが変化する前よりも高い場合（そのものの自身の変化）とあるものが別の何かに対する関係で、変化前より高い場合（関係上の変化）の二つの場合を指し示す。両者は一つの現実の両面であるといえる。マリファナ吸いの場合には「あるもの」とは心であり、「別の何か」とは心を形成し、心が統御する事柄、つまり、自我と社会である。すなわち、「高揚した状態」とは心の意識・中味またはエネルギーの変化ともう一方では意識に照して考えた場合、自我と社会に対する心の位置の変化である。この変化は原理としては巨大なので、社会のまっ

うな人々は一瞬たりとも我慢出来ない。勿論、現実には、この巨大さは幻想なのだが、彼等は現実ではなく、原理——しかもふくらまされた原理にもとづいてマリファナを追放する。しかし、現実には、この変化、すなわち「高揚した状態」は人間の過程のもっとも普通のもの——気分の変化——を、変化を認識する仕方は「言葉の魔術」を、そして、変化の諸結果、諸徴候の統合・要約は現代生活のもっとも普通の状態——陳腐さ——の意味を利用することでなされる。ところで、人間の存在の種々の状態、意識的な気分についての理論がなければ、主体は位置づけられないのである。

△目覚めること▽ うとうとした状態、半眠、または睡眠から目覚める経験は珍しくない。しかし、ある種の仕方で見覚めることは——マリファナ経験には限らないが——普通ではない。重要なのは目覚めの時とその直後の心、自我そして社会の配置である。主体の中でのこの配置こそ、気分の鍵となる意味の一つである。そのうちに、主体が日常生活で親しんでいる気分 (even keel)——つまり、彼にとって普通の、心、自我そして社会の配置——が回復する。この回復の意味は何か。それはどの様にマリファナの気分を明らかにするのか。目覚めの瞬間

に、意識はその対象——心、自我そして社会——と巡り会い、これを対象化する。各々の対象は意識にとまづて存在する。たとえば精神病の様な例外を別にすれば、心、自我そして社会の意識は、配置の普通の変化の枠内に統合されている。目覚の時に意識の照明は三対象にゆき渡ってはいるが、ゆき渡り方が平均していないのである。ここが要点である。さて、われわれはしばしば普通の気分（*even keel*）でないために、普通の気分とはどんなものかを知っているのである。われわれはしばしば意識の三対象が——統合されてはいるが——勾配をもって意識の内に配置された状態にいる。これらの普通に感じられる、*even keel*からの逸脱のうち三つのものに焦点を合わせよう。

〈意識の三つの気分〉 第一は、「自分を意識している状態」(*Being self-conscious*)である。典型的な状況を二つあげよう。一つは、じっと見つめられている状態であり、もう一つは、たとえば年令、性別、人種その他問題となっている事柄によれば主体が不適切な場所にいる状態である（両者の違いは小さい。間違った場所にいるときには、我々は目立っており、したがって見つめられる危険がある）。このような場合一寸考え

た後で、主体は自分に強情に焦点を合わされ、まなざしをそがれた（*サルトル、メルロ・ポンティ*）——またはそのように思われる——直接的で具体的な異様な小社会にいる自分に気づく。この場合、平静な状態からの変化は、自我が意識を他の二者から自身に引きつけることにある。主体は自我を意識するようになる。しかし、心、自我そして社会の統合は過度に乱されるのではなく、全体として、別の配置、したがって違って感じられ経験される存在の状態に移動するのである。

第二は「物事に没頭している状態」(*Being engrossed*)である。たとえば、スキー、会話、政治活動、恋等のように主体が一時期加わっている具体的で直接な社会に意識が引きつけられている状態である。ここで「社会」とは、ある時に世界で主体がやっていること、すなわち、彼の投企（*Project*）である。投企においてこそ、具体的に、限定された、直接的な社会を認めることができる。しかも、主体はその社会を統御しうる。それ故に全ての人は「投企における社会」(*Society-in-the-project*)を意識しうるし、意識している。勿論、心と自我の意識は残っているし、投企においても意識はいろいろなものに向いうる。その一つの場合として、もっとも望ましい状態、「物事に没頭



している状態」がある。主体は自分がやっている事に夢中になって、我を失い、少くとも忘れている。この状態こそ、ミッドが人間と社会の深い関係として提示したものである。主体が投企に集中した後は、その投企は、どんな性格のものであれ、決して同じものではない。投企はなるべきものに、少しでも近づく。主体は投企と、投企における社会に自分の刻印を残す。そして、この投企における社会は、有機体の内に新しい自我を形成する絶え間ない投企において使われる。

第三に「反省している状態」(Being reflective)が問題となる。意識を使って主体は社会と社会から形作られる自我について反省することができるが、結局、意識は成長しつつある自身を対象として取りあげ、それに集中する。この状態は——しばしば混同される——「没頭している状態」ほど良いものではなく、しかし、「自分を意識している状態」よりも良い。この状態は三つのうちで、もっとも考えることが困難な気分である。その理由は、一つは、自らの上に重ね合わされていることを考えることに内在する困難であり、もう一つは、心が過去の自我と社会についての意識を貯えており、しかも、気がかりな材料を抑圧し、記憶していないようにするのに協力さえしている

ことである。このことは空想——もっとも統合されていない形態——の場合には問題がないが、空想と共に空想を越える投企がある場合には重大である。つまり、意識が現在、別の投企に直面しながら過去の投企の意識を貯える心に引きつけられている場合である。ここで関心があるのは勿論、空想のように、世界から小休止している間に反省している場合ではなく、世界にありながら、すなわち、あることをしながら反省している場合である。その様な状態では、われわれが行っていることは、全く知られていないわけではないが不思議な性格を帯びる。特に、うとうとした、意識のはっきりしない時はそうである。

△マリファナの気分▽ 半眠状態で、主体は気分の変化に全く適した状態になっている。この場合、意識は三対象のどれにも向いうるが、いわれたものに、向うことがもっとも可能性がある。マリファナ経験では普通、自省的になること、つまり、意識を心に向けるようにといわれる。これは経験によって身につけられる。主体はまず、何かが起こるから注意するようにいわれる。この注意していることが実は、すでに反省への動きである。それは、別の気分や平静な気分に戻ることもできるから部分的なものであり、誰でも慣れている種類のものである。しか

し、この注意がなされると、主体は高揚する準備がととのったといえる。主体はとうとうとしながら、状況の論理または他人によって、注意し続けるようにいわれる。主体の意識は——減退しているわけだが——心に引きつけられている。「高揚した状態」という日常用語の表現は節約のため、文脈が——当然のこととして——省略されている。すなわち、心の意識が「高い」のは、意識が心に引きつけられており、そのために自我と社会の意識よりも減退するのが遅いからである。しかも、全体の意識状態、つまり、文脈が低いので、絶対的には以前の状態よりも低いにも拘わらず「高い」のである。主体は「やめる」(Turn off)まで、このトリックを続け、自分の心が、それ自身とそれを取りまく対象をいかに意識するようになっていくかと思う。

「高揚した状態」の結果は平凡さに対する感受性である。何かが日常的なものにつけ加えられる。つけ加えられるものは、物事がどのように組み立てられているか——日常的なものがどのように合わされているか——についての洞察にもとづいた、日常的なものの理解、つまり、平凡さに対する感受性である。平凡さは現代生活の普通の状態であるが、それに対する感受性

はそうではないから、その意味でマリファナの気分は異常であり、この体験は多くの人にとって「面白い」(fun)。「高揚した状態」は、しばしば「頭がフラフラする」と表現されるが——それは真実から決して遠くない——「高揚した」または「頭がフラフラする」状態と日常的なものに対する感受性との結びつきが考えられねばならない。まず、心の意識は全体的な気分——意識の配置とどのようにしてそうなったか——を認識し、その認識を世界に感受性として投影する。意識の配置における心の位置は相対的なものにすぎないから、世界を相対性として認識する以外にはない。相対性が世界の認識に投影される。相対性の意味と世界における平凡さの構成とが部分的に一致する。すなわち、あるものが日常的なものになるには、そのものが当然とされねばならないが、当然とされていることは信念である。相対性はこの信念を一時停止するのである。椅子を例にとるならば、椅子はただの椅子であり、日常的には表面的に意味——たとえば、誰の作であるか等——を抑圧・喪失したものとして、取扱われる。そうでなければ、われわれは日常生活を営むことができない。相対性はこの信念を一時停止する。相対性の意味は、全ての物事は一つの文脈の内に存在しており、この

文脈は物事の外觀の意味・本質に相当するということである。一部であっても、相対性の認識によって信念——日常的なものの当然とされた意味——が一時停止されると、文脈または外觀の意味が浮き出してくる。

相対性の認識（それはもうろうとした反省にもとづくもので化学的刺激を要しない）、平凡さに対する感受性（それは気まぐれなもので特定の対象物に定まらない）そして、浮き出てくる意味（それはわれわれがよく知っているもので、ただ当然としているもの）の三点は、マリファナは重大なものと考えるべきではないことを指摘している。改善も現実離れもともに、物事の本質から遠ざかる。ベッカーはそうではない。「高揚した状態」の経験は決して荒々しくも、深くもない。それは「面白い」だけである。信念が停止され、日常的なものの美学が明らかにになる。全ての対象は——平常な状態では停止されている——意味をもち、主体の想像力を魅きつける。日常的なものは異常なものになる（たとえば、音楽は全く音楽的なものとして聴かれる）。「高揚した状態」の徴候は無数であるが、そのもっとも不思議な局面は、主体が日常的なものの意味を始めから知っていたという意識的な認識である。ここにマリファナ吸いの幻

想性がある。すなわち、感受性がマリファナ吸いから来ていることを当然としてその点を問題にせず、その感受性を信じてしまい、感受性が生じた過程——つまり、マリファナのせいであること——は人間的意味を失うのである。しかも、平常状態に回復すると信念は以前と同様になり、平凡さに対する感受性も鈍いままである。つまり、文字通りの深い意味で、全ては幻想である。

全く慣れていず、いつも「やめて」いる者はマリファナ体験は面白くないと思う。一寸だけうまく行った者は薬物を使っても、すぐに平常状態に似た状態に回復し、しかもその状態を不快に感ずる。「高揚した状態」は全く簡単に中断・妨害される。特に問題なのは「退屈な人物」(Bored)である。かなり上達したマリファナ吸いは、このような退屈な人物に出会うと別の所に行ってしまうか、完全に眠ってしまう。更に上達している場合には——ここに全く退屈な奴がいる、という——この平凡さを一寸考えた後で、別の対象に移る。しかし、それができるのも、主体がその人物につきまとわれない場合に限る。したがって、マリファナ吸いの仲間は「高揚した状態」のデリケートな気分を維持するという内的理由と、安全の維持という外的理由

から、宗派的になる強い傾向をもつ。マリファナ吸いになる過程には対処すべき、更に多くの問題がある（たとえば、マリファナを手に入れること等）。ベッカーが扱った問題（"Marihuana Use and Social Control"）は、アメリカではマリファナが禁止され、社会統制下にあることと関連している。この現実には、主体が通過する過程を形成し、主体が常に考慮しなければならぬ諸問題を提示する。しかし、それは別の問題ではない。Aの意味はSの過程で更に明らかになり、ALも新しい意味を展開させるであらう。

# 註

(1) Affinity は普通、類縁性、親和力という意味であるが、ここでは、ある条件はある結果に向う傾向を持つという場合の、「傾向性」という意味である。Aと略称する。

(2) Affiliation は普通、加入という意味であるが、ここでは、本文にもある通り、「帰依」という意味で使われている。ALと略称する。

(3) Signification は本来、表示、通知という意味である。しかし、ここでは第七章（本紹介の（2）参照）に見るよう

に、ある人、行為を逸脱的と決定することを中心に理解されている。Sと略称する。